

数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル) 令和5年度自己点検評価について

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本教育プログラムは、高松大学との連携開設科目「数理データサイエンスと未来」を核とし、卒業必修の「情報基礎演習」「情報応用演習」を通じて数理データサイエンスのリテラシーの涵養を行う。また、本教育プログラム修了要件の必修である「情報基礎」についても早期履修を推奨している。修了者数については、「情報基礎演習」「情報応用演習」が卒業必修科目であることから、卒業者数の90%が本教育プログラムを修了することを目標としている。 令和5年度の実績として履修者は高松短期大学全学で79名に留まり、修了者は3名であった。「数理データサイエンスと未来」及び「情報基礎」の受講者は、秘書科(現ビジネスデザイン学科)に限られ、保育学科の受講者は0名であった。保育学科においては、2年間で免許・資格を取得しなければならないため、カリキュラムが過密であり、時間割の制約を大きく受けている。特に「情報基礎」については、秘書科(現ビジネスデザイン学科)4名の受講に留まった。2クラス化やオンデマンド学習を含む多様な受講方法など、時間割の制約を受けることなく希望者が履修できるよう、検討を続けている。
学修成果	本教育プログラムを構成する各授業科目について、成績データを分析している。現時点では、本教育プログラムの修了者は3名であるが、途中段階における学修成果は達成しているという認識を得ている。また、学生による授業評価アンケート調査の結果も、これを裏付けているといえる。これらをもとに個々の授業内容や本教育プログラムの構成について、改善に向けた取組みを行う。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生による授業評価アンケート調査の結果、「数理データサイエンスと未来」について、設問「授業内容は分かりやすかったですか」に対して、「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では55.6%であった。卒業必修科目「情報基礎演習」については、保育学科では100.0%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では81.3%に達しており、卒業必修科目「情報応用演習」についても、保育学科では90.9%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では79.2%に達していた。理解度の状況は良好である。 今後の授業改善にあたって、内容の精選や教授法及び教材の工夫により、新規性のあるトピックを取り入れつつ、学生にとって分かりやすく意義の感じられる授業を目指している。本教育プログラムを構成する他の科目についても、同様の授業改善により、優れた教育プログラムとなるよう取組む。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「数理データサイエンスと未来」について、設問「授業を通して学問や勉強に対する意欲・興味が増しましたか」に対して「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は63.9%であった。また、設問「総合的に判断して、この授業に満足していますか」に対して「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は63.9%であった。 また、卒業必修科目「情報基礎演習」においては、意欲・興味が増した旨の回答は、保育学科では97.1%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では87.5%に達しており、授業に満足している旨の回答は、保育学科では97.1%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では87.5%に達している。卒業必修科目「情報応用演習」においても、意欲・興味が増した旨の回答は、保育学科では90.9%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では75.0%に達し、授業に満足している旨の回答は、保育学科では90.9%、秘書科(現ビジネスデザイン学科)では87.5%に達している。これらから、後輩学生に対する推奨度については、否定的な考えを有する学生は少ないものと推測できる。 今後の授業改善にあたって、内容の精選や教授法及び教材の工夫により、学生にとって、より分かりやすく意義の感じられる授業を目指している。本教育プログラムを構成する他の科目についても、同様の授業改善により、優れた教育プログラムとなるよう取組む。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムは、高松大学との連携開設科目「数理データサイエンスと未来」を核とし、卒業必修の「情報基礎演習」「情報応用演習」を通じて数理データサイエンスのリテラシーの涵養を行う。また、本教育プログラム修了要件の必修である「情報基礎」についても早期履修を推奨している。修了者数については、「情報基礎演習」「情報応用演習」が卒業必修科目であることから、卒業者数の90%が本教育プログラムを修了することを目標としている。 令和5年度の実績として履修者は高松短期大学全学で79名に留まり、修了者は3名であった。「数理データサイエンスと未来」及び「情報基礎」の受講者は、秘書科(現ビジネスデザイン学科)に限られ、保育学科の受講者は0名であった。保育学科においては、2年間で免許・資格を取得しなければならないため、カリキュラムが過密であり、時間割の制約を大きく受けている。特に「情報基礎」については、秘書科(現ビジネスデザイン学科)4名の受講に留まった。時間割の制約を受けることなく希望者が履修できるよう、2クラス化やオンデマンド学習を含む多様な受講方法が望まれている。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	現時点において本教育プログラム履修者は在学中であり、修了者も0名であることから、本項目の評価は得られていない。今後の予定として、定期的開催される本学同窓会において実施している卒業生対象のアンケート調査において、本教育プログラム修了者の状況を把握する見込みである。また、企業の採用担当者を対象としての聞き取り調査の一環として、本教育プログラム修了者の評価等の調査を行っていく。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本教育プログラムでは、未来社会Society5.0において活躍できる人材にとって必要不可欠と考えられる、数理・データサイエンス・AIについての基礎学力を身につけ、価値創造や課題解決に向けた実践的能力を身に付け、また、情報セキュリティや情報倫理の観点から、数理・データサイエンス・AI技術のあるべき活用のあり方を理解し、不適切な利用を防止できることを目的としている。これらの能力を備えた人材が、社会において相応しい評価・処遇を受けることができるよう、本学では地域社会に対して本教育プログラムの意義について周知を図っていく。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること		各授業科目においては、身近で具体的な事例を題材とすることや近未来の社会像を具体的に提示することで、学生にとって分かりやすく学ぶ意義を理解できるよう工夫をしている。また、学生には授業内で小さなタスクを課し、それができるようになるまで個々の学生に対し粘り強く向き合う授業展開を行うことで、学生が達成感を積み重ねることができるよう配慮をしている。学生同士が相互にコミュニケーションを図りながらタスクに取り組むことを奨励し、躓きがちな学生に対応しながら学修を進めている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載		Google Classroomを活用することで、学生は随時反復学習を行うことができるようになっている。また、授業改善の取組みとして、学生による授業評価アンケート調査の結果に対して、授業担当教員がフィードバックコメントを回答するとともに、次の5項目の観点をもとに次年度の授業の改善を図っている。1. 具体例やアナロジーを用いる、2. タスク指向の学習を採用する、3. グラフや図、動画などの視覚的補助を用いる、4. フィードバックを積極的に行い、学生が正確に理解しているかどうかを確認できるようにする、5. シミュレーションなどで実験的・試行錯誤的な要素を用いる。これらの改善の取組みに加え、令和5年度入学生からはBYOD(持込PC)の活用を図っている。